

パンタナル通信

南北米福地開発協会 会報 2005年10月1日発行 第25号



2005.09.03

第6回国際協力青年奉仕隊（8月25日-9月14日）パラグアイ、カトレセ デ マジョ村にて活動



子供達に折り紙を教える。

2005.08.31



小学校校舎土台工事

2005.09.02

第六回国際協力青年奉仕隊が多くの方の支援と期待の元に八月二十五日成田を出発し、アメリカ、ブラジルを経由し、パラグアイの首都アスンシヨンに到着。そこからバスと舟で目的地カトレセ デ マジョ村に到着しました。日本を出発して四日後、遠い遠い道のりでした。

到着するとすぐに好奇心溢れる村の子供達が学生達の周りに集まり、一人一人の学生の周りにグループができ、自然の中での交流が始まりました。

八月の気候は日本と全く反対の冬で南米とはいえ、肌寒いほどでした。早速、日本救援衣料センターから頂いた衣料と川崎市の市民の方から送つて頂いた文具を一人一人の子供達に袋に入れて渡しました。子供達は受け取った服をすぐに着て、心から感謝と喜びを表していました。

男子学生達はすぐに学校建設の土台の基礎固めの労働を、女子は子供達に、折り紙を教えたり、縄跳びなどをはじめました。

学生達にとっては日本と全く異なる生活環境の中で驚くことばかりであったようですが、賢明にインディヒナの子供の未来のため学校を建設できることに喜びを感じ、彼らが賢明に働く姿に、スタッフとして参加した私自身、感動しました。

カトレセ デ マジョ村での活動
小学校の校舎建設の為の土台作り



子供達との交流



レダでの活動

自然との触れ合いと植樹



南北米福地開発協会事務局

電話
○四四
ファックス
○四四
八一九一
一八二〇
テ一一三一〇〇〇一
神奈川県川崎市高津区
溝口二
十一
十五
岩崎ビル四階



表敬訪問『マジョ村での奉仕をした



アスンションにあるジャイカ事務局と日本大使館を訪問した。ジャイカと日本大使館が今日までパラグアイに行なってきた支援活動について聞き、国際社会での日本の役割に理解を深めることができた。また、教育省を訪問し、副大臣からバラグアイ教育の現状を聞くと共に今回のマジョ村での体験を報告した。インディヒナ村への教育は政府もほとんど指導をすることが出来ず、いるので、当協会の活動に注目しているところであった。その後、ABC新聞社に訪問し、貴社からインタビューを受け、記事が次の日に掲載された

イケアスの滝と鳥の公園訪問



参加者の感想

川瀬史安（新潟大学四年）

この村での奉仕活動は正味四日間と非常に短いものであり、

内容も学校建設と子供達の面倒
ことが主であった。しかし、この

川瀬史安（新潟大学四年）
この村での奉仕活動は正味四日間と非常に短いものであり、内容も学校建設と子供達の面倒を見ることが主であった。しかし、この四日間が三週間の中での一番貴重であり、人生の中で一度しか味わえないくらい非常に稀な経験のできる日々であったと思う。それ程、普段日本で暮らしている生活とのずれを感じたのだ。見るもの、触れるもの、口にするもの、聞くもの、嗅ぐものまで自分の五感すべてが何らかの違和感を持つたはずだ。今、振り返つて見ると本当にそう感ずる。こんな大自然の中であんなにきれいな朝日、夕日を見たことはないし、靴を履いていない子供や不衛生のために、体の至る所に斑点のある子ども、そんな彼らと手をつなぐことになつとした恐れを感じてしまつた自分、トイレの異臭、固くて少し臭みのあるヤギの肉、南米なのに風邪を引いてしまうほど寒い天候の中、本当に心身ともに温まるマテ茶、夜明けに聞こえてくる小鳥のさえずり、そして浅い眠りを必ず妨げた大酋長の歌声・・・。
普通に考えれば到底生活できないような場所に四日間いたわけである。しかし、そんな中にも喜びというか心の豊かさも味わう事が出来たのだ。日本とは比較できないほど、低い生活水準の中で、彼らは本当に純粋な心を持っていたのだ。彼らの笑顔を見るとこちらがうれしくなってしまう。子供から大人までみんなそうであった。

の事務所で「為に生きる」ということを
念頭において奉仕活動をしてくるように
教わったが、そんなことは意識しなくて
もそれが人間が本来あるべき姿ではない
かという思いにさせる四日間であった気
がする。奉仕活動自体が為に生きる事で
あるが、実際そんなことは、意識する必
要はないのではないかと思つた。

和田三和（東京海洋大学卒）
『三週間、とても短くて、
あつという間に過ぎていっ
てしました。日本に帰
りたくないような気分です。この3週間、
何もかもが初めての経験で、貴重な時間
を過ごすことが出来ました。何か人の役
に立ちたいとボランティア活動に参加し
たのですが、結局なにもできなかつたよ
うに思います。マジョ村での四日間とい
う短い期間での奉仕活動も、子供達の笑
顔に、大自然の中に、都会では味わえな
い喜びや開放感を強く感じる事が出来、
与えられるものばかりでした。特に子供
達とは重心に返つて一緒に遊び、無邪気
な笑顔に心を癒されました。電気、水道
のない、食べる事も満足にできない村
の方々の生活を見て、自分はとても恵ま
れた環境にいたんだと再発見をし、何も
してあげられない自分の無力さを実感す
るだけだった。物質的には貧しくとも心
は豊かなのだと感じた。レダに居る期間
は乗馬も馬車も釣りも斧を持つのもすべ
てが初めてで、毎日心踊るような体験を
させていただき感激しました。